



Title	女性の自己像の発達的变化：北村晴郎における「客 体としての自己」の視点から
Author(s)	大橋, 明
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1996, 1, p. 39-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10480
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

女性の自己像の発達的变化

～北村晴朗における「客体としての自己」の視点から～

大 橋 明

「私」は大学生である……、「私」は活発な人間である……、恋に傷ついて「私」の心は張り裂けそうだ……など、人はそれぞれ、自分自身について何らかのイメージや感情を抱いている(菊池, 1970)。そして人は、自分の思いや自分の置かれている状況を把握し、何らかの行動をとる。このような個人の意識体験や行動をその人の内部から理解し説明しようとして(小山田, 1971)、自我の問題に焦点が当てられるようになった。特に、Allport, G. W. (1943) が自我についての主要な8概念を示してから、非常に多くの研究がなされてきた。しかし、Bertocci, P. A. (1945) と Symonds, P. M. (1951) に代表されるように、自我についての概念内容は研究者によって多種多様であり混乱を招いてきた。

自我の概念の整理を試みた北村(1957)は、行動や意識の主体たる自我は2つにわけて考えることが一般的であるとし、主体としての自我と主体たる個人の意識体験にあらわれる客体としての自己を挙げている。この客体としての自己について、James, W. (1890) は、広義の自己を「個人の身体、精神力、衣服、家、妻子、祖先、友人、評判、職業、土地、馬、ヨット、預金など、人が自分のものということのできる全てのものの総和」とし、自己の構成要素として物質的自己(The material Self)、社会的自己(The social Self)、精神的自己(The spiritual Self)を提示している。北村(1977)によるとCooley, C. H. (1902) は、他人の眼に映った自己の姿についての個人の想像、自分の姿に対する他人の判断についての個人の想像、誇りや悔しさなどの自己感情、という3つの要素を指摘している。また北村(1978)自身も、顔、身体、自分の家族、国家、自分の所有物、地位、身分、欲求、情動などに分類している。このように、客体としての自己はその覚知(awareness)の内容において広い範囲にわたっている(小山田, 1971)といえる。

主体としての自我がその性質上対象化されないために現象的に直接把握されないのに対し、客体としての自己は対象化され現象的に把握可能であることから現象的自己と呼ばれている。つまり、自我の問題を直接に扱うことができるのは、現象的に把握可能な客体としての自己

である(守屋, 1994)。この客体としての自己についての意識内容は、自己知覚、自己像、自己観、自己概念、自己態度などと呼ばれている(本研究では「自己像」と統一して用いる)。

その自己像について、北村(1977)の「自分はこういうものだとして人が心の中に常に抱いている全体像」とするところに従うと、自己像とは自己の身体を含むさまざまな客体としての自己を包括する全体的なものとしてとらえられる。つまり、自己像を把握することは、その個人やその個人が属する集団を理解することにつながっていくと考えられる。

ところで、自己像を研究する方法としては、①評定法あるいはチェックリスト法、②Q分類法、③投影的方法(TAT・20答法)が挙げられる(小山田, 1971; 溝上, 1995)。評定法、チェックリスト法及びQ分類法は、自己像を数量的に扱うことができるという長所を持つ反面、記述項目や形容詞が既に決められているために、個人個人が別個に持つ内なる世界に焦点を当てるのが難しいと考えられる。それに対して、投影的方法、特に20答法は「個人の視点から、何らかの手がかりをもとに自由に表出する」ものであり「その趣旨は大部分において個人に委ねられる」方法(溝上, 1995)としてとらえることができる。つまり、20答法は「私」について自発的かつ自由に記述させる方法であり、評定法などにみられる短所を補い得る方法であると考えられる。

20答法(TST:Twenty Statements Test)を用いた研究は、Kuhn, M. H. & McPartland, T. S. (1954)に始まり、日本では星野(1967)、菊池(1968, 1970)、小山田(1971)らによって行われているが、青年期までの発達的变化に観点をのこした報告が多い。また、青年期以降を対象とした自己像の研究は、下仲ら(1976)による老年期の自己像の発達的变化についての報告をはじめ幾つかあるが、20答法による研究は筆者の知る限りにおいてみられない。

本研究では青年期以降の女性を対象とし、自己像のどの側面が発達につれて変化していくかを20答法を用いて検討したい。

1. 方法

(1) 対象者

岐阜大学と東海女子大学の女子学生、岐阜市及び周辺地域在住の主婦及び女性老人である（以下ではそれぞれ女子大学生、中年女性、女性老人と記す）。

表1に対象者の基本属性を示す。

女子大学生に対しては集団法で、中年女性には婦人会に委託し実施した。女性老人に対しては、1件ごと訪問し個別法で実施した。

表1 対象者の基本属性

《年齢》	女子大学生	中年女性	女性老人
対象者数	90	41	25
平均年齢	19.97	47.41	71.48
S. D.	0.89	4.76	6.15

《現在の職業》	女子大学生	中年女性	女性老人
農林漁業	—	4 (9.8)	4 (16.0)
鉱・建設・製造	—	1 (2.4)	1 (4.0)
運輸・通信	—	—	—
卸売・飲食	—	—	—
金融・保険	—	—	—
サービス業	—	6 (14.6)	—
公務	—	—	1 (4.0)
主婦・なし	—	26 (63.4)	19 (76.0)
学生	90 (100.0)	1 (2.4)	—
その他・不明	—	3 (7.3)	—

() : %

《家族形態》	女子大学生	中年女性	女性老人
一人暮らし	—	—	—
夫婦のみ	—	5 (12.2)	9 (36.0)
二世帯	55 (61.1)	16 (39.0)	6 (24.0)
三世帯	33 (36.7)	19 (46.3)	10 (40.0)
その他・不明	2 (2.2)	1 (2.4)	—

女子大学生（下宿生）は自宅の場合を回答 () : %

《交流状態》	女子大学生	中年女性	女性老人
交流あり	65 (72.2)	34 (82.9)	17 (68.0)
交流なし	25 (27.8)	7 (17.1)	8 (32.0)

() : %

(2) 手続き

20答法を使用した。これはKuhn, M. H. ら (1954) が自分自身に対する態度をとらえるために考案したものであるが、本研究では小山田 (1971) の方法を参考にした。「私 (わたし) はどんな人だろうか」と自分自身に問いかけてみてください。そして、頭に浮かんできたことを20通りのちがった文にまとめてください。「私は」という言葉に続いて、15分間で書けるだけ書いてください」という指示をした後に実施した。

15分後、記述された反応の各々について、受容度 (満足している程度) について5段階で評定させた。

(3) 反応の分類基準

北村 (1978) が分類した「客体としての自己」を用い

て次のようにカテゴリー化した。

- ①「身体・顔貌」 → 自分の身体、特に顔貌
- ②「家族・所属団体」 → 自分の家族、所属団体・社会・国家
- ③「所有物・財産」 → 自分の所有物・財産、制作物・作品、名声・名誉
- ④「社会的地位」 → 自分が所属する社会的地位や職業、身分・役割あるいは経歴
- ⑤「意欲・感情・思考」 → 意欲・感情・思考内容
- ⑥「才能・性格」 → 才能・性格
- ⑦「主義・主張」 → 自分が尊重している主義・主張、生き方、宗教的信仰
- ⑧「その他」 → ①～⑦に当てはまらないものの

反応内容の分類方法は小山田 (1971) を参考にして、各群毎に同一の反応を8カテゴリーに強制分類し、そのうち同一カテゴリーに2度以上分類されたものを分析の対象とした。

2. 結果

(1) 平均反応数

各群の平均反応数は表2に示した通りである。

分散分析の結果、平均反応数は加齢に伴い有意に減少している ($F(2, 153) = 22.58, p < .01$)。LSD法を用いた多重比較によれば、各群間にそれぞれ有意差がみられた ($MSe = 15.37, 5\%$ 水準)。

表2 20答法の平均反応数

	女子大学生	中年女性	女性老人
対象者数	90	41	25
平均反応数	19.10	15.63	13.56
S. D.	2.66	5.00	5.37

(2) 反応内容の出現率

女子大学生、中年女性、女性老人における反応内容を先述のカテゴリーに分類し、全反応に対する比率を表3及び図1に示した。

χ^2 検定の結果、反応の偏りは有意であった ($\chi^2 = 193.79, df = 14, p < .01$)。残差分析を行った結果、女子大学生では「才能・性格」の反応が多く、「家族・所属団体」「意欲・感情・思考」「主義・主張」の各反応が少なかった。中年女性では「家族・所属団体」「意欲・感情・思考」の各反応が多く、「身体・顔貌」「才能・性格」の各反応が少なかった。女性老人では「身体・顔貌」「家族・所属団体」「所有物・財産」「主義・主張」の各反応が多く、「才能・性格」の反応が少なかった。

表3 反応内容の出現率

	女子大学生 N=90	中年女性 N=41	女性老人 N=25
身体・顔貌	159 (9.25)	43 (6.71)	44 (12.98)
家族・所属団体	63 (3.66)	70 (10.92)	29 (8.55)
所有物・財産	16 (0.93)	9 (1.40)	8 (2.36)
社会的地位	53 (3.08)	30 (4.68)	11 (3.24)
意欲・感情・思考	490 (28.50)	234 (36.51)	108 (31.86)
才能・性格	856 (49.80)	225 (35.10)	90 (26.55)
主義・主張	14 (0.81)	11 (1.72)	24 (7.08)
その他	68 (3.97)	19 (2.96)	25 (7.38)
計	1719 (100.00)	641 (100.00)	339 (100.00)

() : %

(単位名 : %)

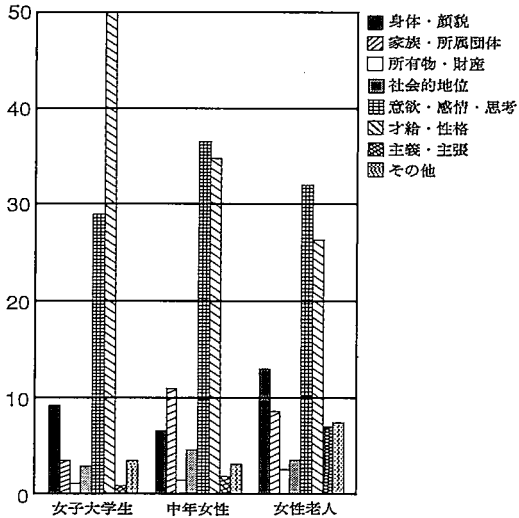


図1 反応内容の出現率

(3) 受容度

受容度の5段階評定を「不満足(-)・普通(0)・満足(+)」の3段階にまとめたものが表4及び図2である。

加齢に伴う変化をみるため χ^2 検定を行った結果、反応の偏りは有意であった($\chi^2=115.37, df=4, p<.01$)。残差分析によると、女子大学生では「不満足」の反応が、中年女性では「普通」と「満足」の反応が多くみられた。そして女性老人では「満足」の反応が多くみられた。

表4 受容度における評定の内訳

	女子大学生 N=90	中年女性 N=41	女性老人 N=25
(-)	657 (38.22)	156 (24.34)	45 (13.27)
(0)	546 (31.76)	242 (37.74)	120 (35.40)
(+)	516 (30.02)	243 (37.92)	174 (51.33)
計	1719 (100.00)	641 (100.00)	339 (100.00)

() : %

各反応の側面についてみると(表5)、女子大学生では「家族・所属団体」「意欲・感情・思考内容」について「満足」とし、「身体・顔貌」「才能・性格」について「不満足」とする場合が多かった。中年女性では「家族・所属団体」「社会的地位」「意欲・感情・思考」について「満足」とし、「才能・性格」について「不満足」「どちらでもない」とする場合が多かった。

女性老人では「才能・性格」について「どちらでもない」「満足」とする場合が多いが、その他のカテゴリでは「満足」とする場合が多かった。

(単位名 : %)

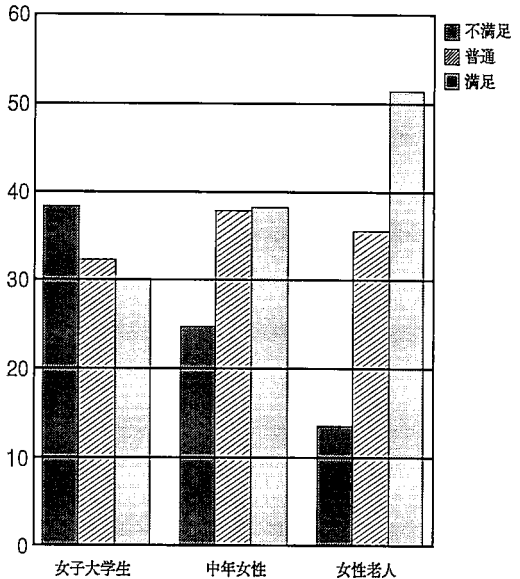


図2 受容度における評定の内訳

表5 反応内容と受容度

	女子大学生			中年女性			女性老人		
	-	0	+	-	0	+	-	0	+
身体・顔貌	3.66	3.44	2.15	1.40	3.12	2.19	2.65	4.13	6.20
家族・所属団体	0.64	0.76	2.26	1.56	4.37	4.99	0	1.47	7.08
所有物・財産	0.35	0.23	0.35	0.31	0.31	0.78	0	0.89	1.47
社会的地位	1.16	0.87	1.05	0.47	1.25	2.96	0.59	0.30	2.35
意欲・感情・思考	7.79	8.14	12.57	5.93	13.89	16.69	3.24	12.68	15.94
才能・性格	22.75	17.04	10.01	13.26	13.10	8.74	5.60	12.09	8.86
主義・主張	0.05	0.41	0.35	0.47	0.62	0.63	0.89	1.77	4.42
その他	1.82	0.87	1.28	0.94	1.08	0.94	0.30	2.07	5.01
計	38.22	31.76	30.02	24.34	37.74	37.92	13.27	35.40	51.33

() : %

3. 考察

加齢に伴い平均反応数が減少しているが、このことは青年期までに分化してきた自己が年齢を重ねるに従って縮小していることを示していると考えられる。また、中年女性と女性老人では反応数に大きなばらつきがみられた。このことは、中年期以降において自己の縮小の程度に個人差が現れていることを示唆している。

反応内容についてみると、「才能・性格」に関する記述が加齢に伴い減少している。また、女子大学生では「才能・性格」が全反応のほぼ半数を占めているが、中年女性では「意欲・感情・思考」の反応数が「才能・性格」の反応数を越えている。更に女性老人では両カテゴリーの出現率は低下するものの、その差は大きくなっている。「主義・主張」は加齢に伴い増加しており、「身体・顔貌」は中年女性で減少しているものの女性老人では増加している。逆に「家族・所属団体」は中年女性で増加し、女性老人では僅かであるが減少している。このことから加齢に伴い、自分の能力や才能について、つまり社会や他者との関わり・比較へ意識が向かなくなり、反対に自分の身体や考え方、つまり自分の内面、心身の状態について意識が向く傾向に変化することが考えられる。

「家族・所属団体」の反応が中年女性で多くみられたのは、職業をもつ対象者が多いこと、対象者の多くが婦人会に所属していること、そして家族と一緒に住んでいることが理由として挙げられる。

受容度についてみると、女子大学生では「不満足」の反応が多くみられた。しかし、女子大学生は全面的に自分に「不満足」という思いを抱いているのではなく、「身体・顔貌」「才能・性格」への不満足が全体としての「不満足」という結果をもたらしている。

Erikson, E. H. (1963) は、青年期の発達課題として「同一性対役割の混乱」を挙げ、成長し発達している若者は、自分の内部の生理的革命（身体の成長）に直面し、また自分たちの目前の実体的な大人の仕事を見て、自分自身が感じている自分と比較した結果、他人の目にどのような自分が映っているかということが第一の関心事になる、としている。このことから、女子大学生の「身体・顔貌」「才能・性格」における反応数と受容度を照らし合わせて考えてみると、女子大学生は外界へと視野を向け、自己を外界との接点に位置づけ、自分自身に対し矛盾や葛藤を感じている（菊池, 1970）ことが考えられる。

女性老人では「満足」という反応が過半数を占めた。「才能・性格」については「どちらでもない」という反応が多くみられたが、他の7つのカテゴリーでは「満足」

の反応が多くみられた。このことは、本研究の対象者となった女性老人が自分自身を受容している状態にあることを示唆していると考えられる。特に老人は、「体が思うように動かない」など身体についての不自由な点を示して不満を表すことが多い。しかし、本研究の女性老人は居宅老人であり健康な対象者が多く、一人暮らしではなく夫や家族と住んでいることなどから、「耳が遠い」「リュウマチで足が思うように動かない」など不自由があっても「家族・友人の助けを借りてなんとかやっている」といったような肯定的な考え方を示す反応が多かった。このような自己のとらえ方が、「満足」の高い結果を導いたと考えられる。

Erikson, E. H. (1963) は、老年期の発達課題として「自我の統合対絶望」を挙げ、「自分の唯一の人生周期を、そうあらねばならなかったものとして、またどうしても取り替えを許さないものとして受け入れること」を自我の統合の状態を形成する要素の1つとしているが、本研究における女性老人対象者は、受容度の側面から見た限りでは「自我の統合」がなされていることがうかがえる。

中年女性も、まさに女子大学生から女性老人への移行中といった受容度の結果がみられた。

このように、青年期以降における女性の自己像は、他者や社会との関係に関するものから、個人の内面や心身の状態に関するものへと、加齢に伴い変化することが示された。また、この変化の方向には受容の傾向が伴うことも示唆された。

以上、主な結果について概観したが、「客体としての自己」の分類について興味しなかったこと、反応内容の分析方法など幾つもの問題点がある。また本研究の対象者は女子大学生・中年女性・女性老人であったが、中年女性は40～56歳、女性老人は65～82歳と、同じ「中年女性」「女性老人」でも年齢にかなりの差がみられた。加えて、発達のな変化をとらえるためには女子大学生と中年女性、中年女性と女性老人の間の年齢層についても調査が必要である。加えて、20答法において中年女性と女性老人にみられた反応数の個人差は、どのような要因によって引き起こされたのか検討しなかった。

「人間がいかに行動するかは、個人が自分というものをどのように知覚するか、そして自分が巻き込まれている状況をどのように知覚するかによる」というSnygg, D. & Combs, W. (1949) の言葉は、個人の自己像を理解することによって個人の行動を把握できるという可能性があることを示唆している。今後は、以上の問題点を考慮したうえで、自己像の発達の機制について、そし

て自己像の特徴や差異が行動にどのような影響を与えるかについて検討する必要があると考えられる。

(臨床老年行動学講座 平成6年度研究生)

[引用文献]

- Allport, G. W. 1943 The ego in contemporary psychology. Psychological Review, 50, 451-478.
- Bertocci, P. A. 1945 The psychological self, the ego, and personality. Psychological Review, 52, 91-99.
- Cooley, C. H. 1902 Human Nature and the Social Order. (北村 (1977) より引用)
- Erikson, E. H. 1963 Childhood and Society. 2nd ed. New York: W. W. Norton. (仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 みすず書房)
- 星野 命 1967 20答法 (T. S. T)による自己態度・自己観の研究 日本心理学会第31回大会発表抄録, 42.
- James, W. 1890 The Principles of Psychology. Dover Publication, Inc, New York.
- 菊池登紀子 1968 女子大学生の自己観—20答法を用いた自己観の発達に関する一研究— 修紅短期大学紀要, 1, 1, 9-16.
- 菊池登紀子 1970 青年期における自己観[I]—私立女子校生における発達の様相— 岩手大学教育学部研究年報, 30, 4, 57-76.
- 北村晴朗 1957 自我 梅津八三・宮城音弥・相良守次・依田新 (編) 心理学事典 平凡社
- 北村晴朗 1977 新版自我の心理 誠信書房 (1962 自我の心理 誠信書房)
- 北村晴朗 1978 総説人間の心理 南窓社
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitude. American Sociological Review, 19, 68-76.
- 溝上慎一 1995 WHY答法についての理論的考察 大阪大学教育心理学年報, 4, 61-71.
- 守屋國光 1994 老年期の自我発達心理学的研究 風間書房
- 小山田隆明 1971 セルフ・イメージの発達の研究 (序報) 岐阜大学研究報告 (人文科学), 20, 88-96.
- 下仲順子・村瀬孝雄 1976 加齢と性差からみた老人の自己概念 教育心理学年報, 24, 3, 156-166.
- Snygg, D., & Combs, A. W. 1949 Individual Behavior: A New Frame of Reference. Harper, New York. (Combs, A. W., Snygg, D. 友田不二男監修・手塚郁恵訳 1959 人の行動: 行動への知覚的アプローチ 岩崎学術出版社)
- Symonds, P. M. 1951 The ego and the self. New York: Appleton-Century. (北村 (1977) より引用)